

ブックレビュー



『現代思想入門 ～人生が変わる哲学。』

千葉雅也 著
講談社現代新書 刊
定価 990円 (本体 900円+税)

2022年春の発刊以来15万部を超えるという哲学書が、23年「新書大賞」を受賞して注目されている。「入門書のための入門書」とはいえ、フランス現代思想の真髄に迫る新書に、なぜ人びとが関心を寄せているのか。読書離れが加速するなかで興味を抱いた。

著者は1978年生まれの立命館大学大学院教授である。哲学や表象文化論を専門に『動きすぎてはいけない』『ツイッター哲学』『勉強の哲学』『意味がない無意味』など数々の話題作で知られる一方、近年は作家活動で野間文芸新人賞や川端康成文学賞を受賞。芥川賞候補にも3度名を連ねた。同性愛者としてカミングアウトしていることも知られる。

20世紀後半にフランスで展開した「ポスト構造主義」などをひも解く本書は、「物事を『二項対立』、つまり『二つの概念の対立』によって

捉えて、良し悪しを言おうとする」思考パターン（構造）を「いったん留保する」こと。たとえば「善と悪、安心と不安、健康と不健康」などの二項対立を「脱構築」するために、「いったん徹底的に既成の秩序を疑う」ことが「ラディカルに『共』の可能性を考え直すこと」につながると説く。そのために現代思想の文脈を辿り、デリダ、ドゥルーズ、フーコーなどをクローズアップする。

それでは今なぜフランス現代思想なのか。著者はそこに「秩序」と「逸脱」の関係を主題に据えて「逸脱」を弁護し、多様性を肯定する「オルタナティブな有限性」を芸術的（クリエイティブ）に生きる可能性を再発見している。言い換えれば、「差異」（存在の偏り）と「仮固定的な同一性」とのグレーゾーンに現代的な「逃走線」を引こうとしている。行動的なその葛藤こそが、経済合理性一辺倒の管理社会に閉塞する読者の共感を呼んでいるということか。

さんかいの げん
(山海野 玄)